社会経済常任委員会
〈道の駅もてぎの事業運営 薪ボイラーを活用したうなぎ養殖〉

社会経済常任委員会は、委員5名、議長、随行職員2名で、2月9日、10日に、栃木県茂木町の「道の駅もてぎの事業運営」および那珂川町の薪ボイラーを活用したうなぎ養殖」について視察研修を行った。

道の駅もてぎ

▼道の駅もてぎの事業運営

茂木町の、道の駅もてぎは、新たな「もてぎ」の情報発信基地であり、具体的には地場産品のPR（紹介・展示）や販路の拡大および新商品の開発など、茂木町の産業振興の場として位置づけている。

第3セクターにより株式会社もてぎプラザが管理運営を行っており、資本金5000万円、代表取締役は茂木町長である。

道の駅もてぎの役割として、道路ユーザーのための休憩所・案内所、地場産品の売場、雇用の場、住民の憩いの場、観光拠点、防災拠点、研修・教育の場、※6次産業の場を掲げている。

道の駅もてぎの理念は、第一に町民のため、第二に訪れる人々のため、第三に従業員のためであり、この理念により「地域に愛され・地域還元、安心・安全・驚き」をキャッチフレーズに社員が自信と誇りを持つことができている。

こうした活動が認められ、平成27年1月30日には、地域活性化の拠点として、特に優れた機能を継続的に発揮していると認められ、国土交通大臣に全国モデル道の駅として選定された。

今後、道の駅もてぎの目指すべきところは、生産調整廃止に伴う米の有効活用として「洋菓子工房の整備」、ほだ木の生産から一括して「菌床しいたけ栽培所の拡大」、直売所出荷者の高齢化に伴う対応として「農場経営」、規格外野菜を活用した商品づくり「6次産業の拡大」で、雇用100名、年商10億円を目指しているという。

▼薪ボイラーを活用したうなぎ養殖

那珂川町のうなぎ養殖場は、薪ボイラーの熱で水温管理を行ううなぎの養殖で実証実験に成功したことから、施設を整備し、本格的に稼働を始めた。課題は燃料費で、水を温めるボイラーの重油代は年間500万円以上見込まれる。一方、町の面積の約6割は山林で、間伐材を使えば町の資源活用になるとの思いから、木材を燃やして熱源にしている。

シラスうなぎからの養殖に取り組んでいるのは、県内で初めてで、養殖に適した水温28℃を保つのは、重油より間伐材等を燃料とする薪ボイラーの方が低コストである。

日に2回、社員が1立方メートルの薪をくべる。薪を一度に入れすぎると不完全燃焼を起こすため、十分に温めてから入れるなど工夫が必要だ。深夜はバックアップ用に重油のボイラーを使い、すべて重油を使う場合と比べ、光熱費は約半分に抑えられる。

初期導入経費は、建屋、配管およびボイラーの総額約3500万円、うち薪ボイラーは1000万円弱、薪ボイラーの耐用年数は10年で、煤（すす）の掃除が必要になる。

事業実施している中、出てきた問題は、煙が着火から10分ぐらいの間に半径100m範囲におよぶこと、ストック用の薪を1年間乾燥させて置く場所が必要であること。ボイラーは農業用のため、30キロカロリーから50キロカロリーのため一定ではないことが揚げられる。

化石燃料は入れるだけで回り続けるが、薪は労力がかかる。でも、地元の資源を使って安価に事業を展開できる。現在は、製材所から木材を提供していただいているが、今後は、個人の方からの買い取り制度に変更し、地域還元を考えている。

最後に、今回の視察では、道の駅もてぎの事業運営および薪ボイラーを活用したうなぎ養殖の先進地について調査した結果、今後の道の駅しもにたの拡張工事や荒船の湯の熱利用になるのではと、大いに参考になった。

（委員長　木暮弘元）

薪ボイラーを活用したうなぎ養殖

※6次産業・・・
農業や水産業などの第一次産業が食品加工・流通販売にも業務展開している経営形態を表す。